
俺がF a t eの世界に転生するはずがない

眠れる英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺がFateの世界に転生するはずがない

【Nコード】

N4628X

【作者名】

眠れる英雄

【あらすじ】

ひよんななことで死んでしまい、テンプレなテンプレをしてしまった俺。しかし、転生先はFateの世界！？ ヤバい、死ねますッ！？ 更に神様から貰った能力も微妙+制限がかり、さあ大変！ 果たして俺は死亡フラグを回避することが出来るのか！？

転生？ テンプレですな（前書き）

すみません、作者です。

こんな未熟者ですが、今度こそは頑張っていきたいので応援してください。

転生？ テンプレですな

赤い何かが飛び散る。視界が赤く染まる。

身体に力が入らない。指一本動かすことすら出来ない。

「……………ゴフッ」

口から何かが溢れる。それは、自分の身体についている何かと同じ色をしていた。

(……………ああ、血か……………)

ボンヤリと、それを他人事のように見詰める。

自分の身体が自分のものではない感じた。もう、全身の感覚が存在しない。

『 ツー！！ ツー！！ 』

目の前に見える少女が何かを叫んでいる。涙を流しながら、自分の血で染まった手で、必死に自分の身体をゆさぶっている。

けど、聞こえない。何も、聞こえない。

意識が反転していく。思考が停止していく。

そんな夢心地の意識の中で、ふと思った。

「……ああ、よかった……」

無事で、本当によかった。

薄れていく意識の中で、真っ黒に染まっていく視界から見える少女を見て、そう、心から思えた。

そして……俺は、二度と目の覚ますことのない、深い眠りについた

はずだった。

「……つと言っわけで、君には転生してもらっつね？」

「……マジでテンプレかよ……」

俺は目の前にいる少女の話を聞き終えると、大きなため息を吐いた。

俺の名前は零^{レイ}。何処にでもいるような、ごく普通の高校生だった。

だった、というのは俺が死んでしまったからだ。いや、これがマジで。

死んでしまった俺は何故かまだ意識があつて、気付くとこの真っ白な部屋にいて、目の前に一人の少女がいた。

「いやー、しかしあれだよな？　トラックに轢かれそうな女の子を見て、助けようとして自分が轢かれるなんて……どんなテンプレだよな？」

「……少し、黙ろうか」

「ぎゃ　　ッ!?　あ、頭が割れちゃう！　わかった、悪かったからヘッドロックは止めて　　ッ!？」

そう泣き叫んで頭を掴む俺の腕を離させようとしているこの少女がこの事件の原因。

本人言わく　　彼女は、神様と呼ばれる類いの存在らしい。

……うん、最初そう言われた時は正気を疑ったよ。」「……………」

は？」と三十秒近く硬直しちまった。

まあそのあと、色々とごちゃごちゃな話をして、その話をまとめる
と

・どうやら俺は死んだらしい

・その時ちようど神様も暇で、何か暇潰しはないかなーと探している所、俺の魂を発見

・「そうだ！ 今流行りの転生をさせてみようッ！」

・俺の魂を回収

・「 と言うわけで、君には転生してもらおうね？」

と、言う感じだ。

……それでいいのか神様。かなり適当じゃね？

「うう………僕、神様だよ？ こんなことして、バチが当たるよ！！
………ってそういえば、君もう死んでるんだよね………」

すると、いつの間に抜け出したのか。俺の掌から離れた神様は痛そうにそこを擦りながら、俺を睨んできた。

……見た目が少女だから、小動物が見詰めてくるにしか見えないんだが？

「……んで？ 俺はどの世界に転生するんだ？」

いつまでも睨まれるわけにはいかないの、強引に話を変える。すると、神様……ああもうめんどくさいなッ！ 神はまだ怒っているらしく、

「ふん！ 君なんてバイオハザードの世界に……！」

「ちょっと待てやこら」

ガシツ、と彼女の肩を掴む。ふざけるな、何で転生先がゾンビワールド何だよ！？ そんなのすぐ死んじまうだろ！？

「チツ……冗談だよ冗談。本気にしないの」

そう言っただけでニコリと笑う神。……その前に舌打ちしたことを俺は忘れることはないだろう。

「君の行く世界は都合上説明できないけど、特別に君には能力をプレゼントするよッ！！」

「おお！！ 何かそれっぽくなってきたッ！！」

まさか本当に能力が貰えるなんてどんだけテンプレなんだ？ ま、とりあえず俺の欲しい能力は……

「んー？ じゃあさ、『直死の魔眼』って貰えるか？」

「……一応聞くけど、どうしてそれを選んだの？」

欲しい能力を言ったらジト目で睨まれた。え？ 理由？ それはもちろん

「『……生きているのなら、神様だって殺してみせるッ！』」

ネタに走りたかったからです、はい。

「目の前で殺人予告ッ！？ そんなの駄目に決まってるじゃない！」

「なん……だと……？」

そ、そんなッ！？ 『直死の魔眼』が手に入らないなんて……

「神は死んだッ！」

「目の前にいるよッ！？」

そう言っただけの言葉に鋭いツッコミを入れる神。……うん、もう十分だな。

「さて、冗談はさておき……」

「あれ？ 今までの冗談だったの！？」

いや、気付けよ。そのくらい、あんた神様だろ。

「まあとりあえず、無難に『無から有を作り出す力』とか、『全てを完璧にこなす力』とかくれよ」

「……………あー、えっと、その……………」

……………ん？ いったいどうしたんだ？

俺が願い事を言った次の瞬間、急に神はオドオドとなって、周りに視線を動かし始めた。

そうやって何度も悩み、口を開こうとして閉じたりして、数分たつてようやく覚悟を決め、

「実は……………そういう願い事、無理なんだよね」

……………
……………
……………

……………はい？

「えっと……………確か、能力をくれるんだよね？」

「うん、そつだよ？」

「じゃあさ、さっき願った能力は？」

「無理」

「何でッ!？」

は？ え？ どういうこと？ 願い事を叶えてくれるんじゃないのか!？

「いや、ねー。実はこの前からリセットするのを忘れててさー。僕が叶えられるのは一回目だけで、同じ願いは叶えることができないんだよねー」

あはは、と悪いと知っているらしく悲しげな乾いた声が響く。

…… ったく、そんな顔されたら怒るにも怒れねえだろうが。

「……で？ 俺の能力はどうなるんだ？ もしかして無事で転生するのさ？」

「ううん、それはないよ。だから君には、この中から選んでもらうよ」

神はスツと空へ手を上げると、呟いた。

「
+ ツ!！」

それは俺には、人間には理解することが出来ない言語。誰だろうか？ 昔、誰か偉い人が言っていた言葉。

『言葉には、意味がある』

今ならわかる、その意味を。その文字に込められた、絶対的威圧感を。

これが……神の奇跡……！！

神の声はその空間に響いた次の瞬間

視界を埋め尽くすほどの大量の紙が、俺を囲むよう螺旋状に舞い降りた。

「な……ッ!？」

そんな神々しい光景に思わず息を飲む。

凄い。これが、これが……神の力。

「これがいま僕が持つてる能力の全てだよ。さあ、選びなよ。この中から君の、君だけの能力を」

そのあり得ない光景の中心で、彼女　神は、薄く微笑む。見守るように、母のように優しい笑みを浮かべながら。

……この中から？　こんな、無限にもありそうな中から？

選ぶのを躊躇する。怖い、恐怖する。もしも、IFを連想させる。

どれだ？ どれを選べばいいんだ？

「……怖いのかい？ 選ぶことが」

そうやって躊躇していると、後ろから神の声が聞こえた。その声は優しく、負の感情を洗い流していくような気がした。

「だったら選らばなければいいじゃないか。君がこれだと思ったものの、無意識で選んだものが、君に一番近いはずなんだから」

「……そうじゃねえか。何を悩んでんだ、俺は。」

俺は螺旋状に渦巻く紙たちに近づき、手を伸ばす。

「……所詮、能力だろ。そんなものがなくても、人は生きていける。なら、どうにでもなりやがれ！」

手が、腕が、無限と呼べる紙の渦に呑み込まれる。しかし、紙が俺の腕に当たる感覚がしない。まるで、紙が意思を持っているように。まるで、何かを待っているように。

そして……

確かに感じる、何かを掴む感覚。

「これ……だあッ!!」

俺はそれを握り締め、一気に紙の渦から腕を引き抜く。

そこに書かれていたのは
!

『直死の魔眼（不完全）』

『刃物を操る力（ナイフ、日本刀のみ）』

『身体能力上昇（歳）』

………はい？ 何だこれ？

書かれていたのは三個の能力だった。……いや、これを能力と言っているのだろうか？

「へー？ どれどれ……うわぁ、よりによってそれらを引くなんて………」

書かれていることが気になったのだろうか？ 神は俺の横に来ると能力が書かれた紙を見て、顔をしかめている。

え、何？ そんなにヤバいのこれ？

「えっと、まず始めに『直死の魔眼（不完全）』のことだけど……
それ、使い過ぎると死ぬよ？」

「……………え？」

は？ 何それ怖い。

「いやーねー、その完全版ならいくら使っても大丈夫なんだけど……
……それ、不完全だね。あまり使い過ぎると脳が処理できず血管が
千切れたり、脳がパンクしたり、拳げ句のはてには目が失明するか
も知れないよ？」

……………。

もはや言葉が出なかった。え、何？ 嫌われてんの？ 俺神様から
嫌われてんのかな？ …… って目の前に神様いるし。

「えっと、まだ続きがあるんだけど……………いい？」

「……………もう、好きにしてくれ……………」

「ハハハ……………えっとね、次に『刃物を操る力（ナイフ、日本刀のみ）
』だけど……………うわぁ、また変なのを引いて……………まあこれは簡単に言
うと、君はナイフと日本刀なら変幻自在に操れるようになる能力だ
よ。それ以外は駄目だけどね」

「……………」

え？ 何これ？ 泣いてもいいよね？ 何で俺の能力は全部制限が

かかってんだよ!? ……いや、そういえばまだ後一つ残ってる！
それにかければ……！

「最後のだけど……『身体能力上昇（歳）』………うん、これは
本当に微妙なやつを引いたね。これは簡単に言えば、その歳で動け
る領域まで身体能力を上げることが出来るやつだね。ちなみに、こ
れが身体能力上昇の最下位に位置する能力だよ」

「神は死んだッ!!」

何故!? 何で!? 何なんですか!?

あまりの運の無さに涙が出そうになる。ちくしょう、俺が何をした
!?

「えっと……どんまい?」

「止めて! そういう同情が一番胸にくるから!!」

ほんと、グサツとくる。精神的ダメージなら9999ダメージは越
えてると思う。

「うーん、こんだけ可哀想だと……よし、決めた! 君は特別に転
生した後も僕が面倒みてあげるよ」

「え、マジで!?!」

ショックを受けていると、唐突に神がそんなことを言い始めた。確
かに、それは嬉しい誤算だった。神がいれば、大抵のことはなんと
かなるッ!

「とじろでさ……君、猫好き？」

「……？ 好きだけど何で？」

「うっんツ！ 何でもない、何でもないよツ！？」

ブンブンと首を横に振る神。……その動作が可愛いと思ったのは内緒だ。

「と、とりあえず全ての下準備は終わったよ。さあ、君の冒険はこれから始まるんだ。悔いは無い？ OK、じゃあ良い旅をツ！！」

そう、神が叫んだ次の瞬間

『カパツ』

「……『カパツ』……？」

何かが開く音がして、足下から感覚がなくなる。そう、まるで宙を浮いているような

「うわあああああああああああッ！？」

そこまでが思考の限界だった。次の瞬間、突如穴が開いて、その上にたっていた俺は重力に逆らえず意識を失うように落ちていった。

『……あ！ しまった、エラーが……ッ！？』

……最後に聞こえた声が、何故か俺には凄く不安に感じた。

転生？ テンプレですな（後書き）

……あれ？ 何だか前より分かりにくくなっているような……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4628x/>

俺がF a t eの世界に転生するはずがない

2011年10月23日09時11分発行